

【ポスターセッション】

「社会福祉士」資格取得のための実習経験が社会性の形成に与える影響の研究 2017

○ 東京都健康長寿医療センター研究所 多賀努（会員番号 008650）

（キーワード）社会福祉士 実習 社会性

1. 研究目的

昨年度、社会福祉士国家試験の受験資格要件である実習体験が社会性の形成に与える影響を、実習の体験群・非体験群の対照研究において検証したところ、実習体験群において、実習前後における社会性の向上が確認された。本年度は、昨年度のデータも利用して検証を行うとともに、新たな指標の有用性の検証を行うことを目的とした。

今年度調査の特徴の第一は、昨年度の実習体験群の実習効果の継続性を検証したところである。第二は、昨年度調査で「内的不安へ対処する能力」に2つの指標を採用したところ、Social Phobia Scale -J（SPS-J）日本語版は他の尺度ほど感度が良くなかったため、うつに関する傾向を測定する新たな尺度を採用したことである。

2. 研究の視点および方法

社会性形成の指標は昨年度調査に引き続き、（1）内的不安へ対処する能力、（2）社会的に望ましい反応や行動を選択する能力、（3）メタコミュニケーションを確立する能力を指定する。対応する尺度として、（1）Generalized Anxiety Disorder -7（GAD-7）日本語版、新たな指標として Patient Health Questionnaire（PHQ-9）日本語版、（2）Standardised Assessment of Personality - Abbreviated Scale（SAPAS-J）日本語版、（3）自閉症スペクトラム指数（Autism-Spectrum Quotient；AQ-J）日本語版を利用する。同一の質問紙調査を夏休み前後の2回実施し、調査対象者は自記式で回答する。また、昨年度調査対象の実習経験群にも夏休み前に質問紙調査を実施した。

3. 倫理的配慮

本研究は、早稲田大学倫理審査委員会の承認後に実施した。調査対象者は、研究参加が任意であること、侵襲性はないが心理的負担・不快を感じる場合があり中断した際の回答は廃棄すること、個人情報連結可能匿名化等によって管理すること、研究成果は個人情報が特定されない形で学会・学術誌等に発表することを了承した上で質問紙に回答した。

4. 研究結果

調査はA大学の実習を体験した3年生・4年生（体験群）、体験しなかった3年生（非

体験群)を対象とした。実施時期・回答者数は、体験群3年が7月(実習前)16名・10月(実習後)19名、体験群4年が7月16名、非体験群3年が7月33名・10月28名であった。2時点間の平均値の変化を、t検定を用いて統計学的に検証した。

(1-1) 内的不安へ対処する能力: GAD-7 日本語版

体験群3年(4.7-3.9)・非体験群3年(3.9-3.2)・体験群4年(2.4-1.8)ともに、有意な変化は認められなかった($p=n.s.$)。また、体験群3年-非体験群3年の差も有意ではなかった($p=n.s.$)。

(1-2) うつに関する傾向: PHQ-9 日本語版

体験群3年(5.9-6.7)・非体験群3年(5.75-4.7)ともに、有意な変化は認められなかった($p=n.s.$)。また、体験群3年-非体験群3年の差も有意ではなかった($p=n.s.$)。

(2) 社会的に望ましい反応や行動を選択する能力: SAPAS-J 日本語版

体験群3年(20.8-20.4)・非体験群3年(20.6-19.8)・体験群4年(19.6-19.1)ともに、有意な変化は認められなかった($p=n.s.$)。また、体験群3年-非体験群3年の差も有意ではなかった($p=n.s.$)。

(3) メタコミュニケーションを確立する能力: AQ-J 日本語版

体験群3年(163.5-113.8)・非体験群3年(163.0-114.4)ともに、有意な変化が認められた($p=.001$)。しかし、体験群3年-非体験群3年の差は有意でなかった($p=n.s.$)。体験群4年(111.4-110.3)には有意な差が認められなかった。

5. 考察

不安全般に対処する能力・うつに関する傾向・社会的に望ましい反応や行動を選択する能力に有意な変化が認められなかったものの、昨年度は不安全般に対処する能力に有意な向上が認められた(体験群3年 3.8-2.4, $p=.01$)。また、メタコミュニケーションを確立する能力は今年度同様、昨年度も体験群3年(162.1-111.4, $p=.001$)・非体験群3年(164.7-115.3, $p=.001$)ともに有意に向上した。社会性の変化は指標によって年度間にばらつきがあること、夏休み中の体験だけでも社会性の向上が認められる可能性が明らかになった。

実習終了後に各指標を確認したところ、社会的な適応性の観点から実習期間中、予防的に関わった実習生11名のうち7名が、GAD-7Jが3(重度の不安障害傾向)以上、PHQ-9Jが3(中等度-重度のうつ症状)以上、SAPAS-Jが4以上(パーソナリティ障害傾向)、AQ-Jが33以上(自閉症スペクトラム傾向)のいずれか1つ以上に該当した。AQ-Jの閾値を31まで下げると、9名まで捕捉された。実習前に予見できず、実習中断もしくは実習中に問題があった実習生6名のうち4名は、実習前のGAD-7Jが3、PHQ-9Jが3以上、SAPAS-Jが4以上のいずれか1つ以上に該当していた。これらの指標を組み合わせたときの実習中断等の感度は65%、特異度は72%だった。捕捉されなかった4名のうち2名はADHD傾向が疑われ、1名はうつ病歴があったが、服薬が必要ない状態まで寛解していた。